日文研の共同研究

［日文研の共同研究］

日文研の共同研究は、単なる研究成果の交換にとどまるものではなく、多様な専門分野と知的伝統に立脚する研究者たちが研究過程を共有し合うことによって生みだされる国際日本研究をめざしています。これまで日文研が三十年におよび積み上げてきた共同研究の成果を紹介します。

IR-Report 特集号

IRくん
日文研に関する情報の調査及び分析を実施するインスティテューショナル・リサーチ（IR）室のキャラクター。

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国際日本文化研究センター
〒610-1192
京都市西京区御陵大枝山町３丁目２番地
(代) Tel: (075) 335-2222
http://www.nichibun.ac.jp/

インスティテューショナル・リサーチ室
発行日：2018（平成30）年10月23日

平成27年度共同研究員アンケート報告書

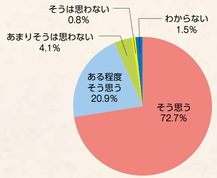
調査概要

日文研では、その主たる活動である共同研究の現状と共同研究員の意見を把握し、組織運営の改善のための資料とするためにアンケートを実施した。

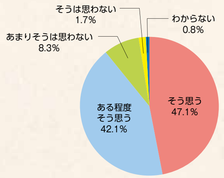
調査対象者：2015（平成27）年度の国内所外共同研究員 301名（名誉教授、元専任・特任教員、送付物受取辞退者を除く）
調 査 方 法：質問紙を郵送し、返信用封筒で回答（無記名）
調 査 期 間：2016（平成28）年７月22日（金）～８月22日（月）
回　答　数：121名（回答率40.2%）

※34問より４問を抜粋

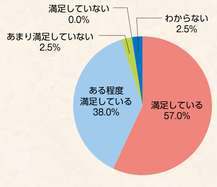
1 所属した共同研究会は学際的だと思いますか？



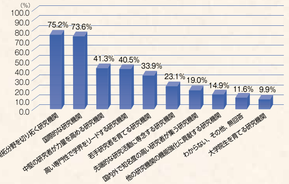
2 所属した共同研究会は国際的だと思いますか？



3 所属した共同研究会に満足していますか？



4 日文研はどのような研究機関であるのがよいと思いますか？



学際性・国際性を問う質問1 2のいずれも、「そう思う」「ある程度そう思う」を合わせると約90%を占めています。また質問3についても、「満足している」「ある程度満足している」を合わせると90%を超えていることから、日文研が標榜する学際性・国際性は、共同研究会において概ね達成しており、全体として満足度は極めて高いと言えます。そして質問4からは、専門性でリードするよりも学際的・国際的な高等研究機関型の組織であることを望んでおり、年齢層では中堅・若手を重視すべきと考えていることがわかります。

日文研の共同研究について

図１

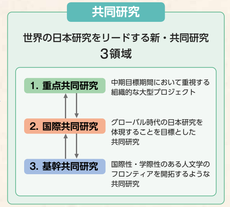


図２

共同研究は、日文研が最も重要視している研究活動です。1987年の創設以来、国際性・学際性を総合する視点から「5域3軸」（図1）という枠組みを掲げて共同研究を組織し、国内外の日本研究者コミュニティの結節点の機能を果たしてきました。そして2017年4月、創立30周年を前に、昨今の日本研究のグローバル化等の現状に鑑みて「3領域」（図2）という枠組みへと再編をおこないました。

具体的には、①日文研が中期目標期間において重視する組織的な大型プロジェクトを担い、先端的な学界動向に機動的に対応する「重点共同研究」、②研究対象地域を日本に限定せず、広い観点からの比較や文化の相互交流や歴史の変容をも対象とする、国際的研究指向の強い「国際共同研究」、③国際性・学際性という創立以来の強みを活かしつつ、人文学のフロンティアを開拓するような「基幹共同研究」の３つです。

共同研究の研究代表者には、日文研の専任研究者だけでなく、研究課題自由設定公募を経て選考された国内外の研究者が就いています。共同研究の成果をまとめた商業出版物の書誌情報や国際研究集会の報告書は、日文研のウェブサイトで紹介しています。

図１
共同研究番号１～169

図２（法人化前）
共同研究番号１～88

図３（法人化後）
共同研究番号89～169

30年間における共同研究課題169を解析し、頻度順で可視化してみました（図1）。「頻度＝文字の大きさ」です。
それを法人化前後に分けてみると（図2・図3）、「日本」がなくなり、「東アジア」が大きくなっているのが分かります。

Voyant Tools https://voyant-tools.org/

30年間の共同研究課題169とその関連データを内側に掲載しています。

1987（昭和62）年～ / 1997（平成9）年～ / 2007（平成19）年～ / 2017（平成29）年～

→法人化後（089～）

共同研究番号	研究課題	研究代表者	共同研究員数	(内)海外共同研究員	成果物
001	日本文学と「私」	中西 進	34		『日本文学における「私」』
002	日本文化の基本構造とその自然的背景	埴原 和郎	33		『日本人と日本文化の形成』
003	世界における日本研究の知識社会学的研究	梅原 猛	67		『日本とは何なのか―国際化のただなかで―』
004	「場」の日本文化	村井 康彦	31		
005	江戸時代の芸術における外国文化（中国を中心として）の受容と変容	ドナルド・キーン、杉本秀太郎	25		
006	日本人の他界観	久野 昭	25		『日本人の他界観』
007	日本型モデルのメリットとデメリット	濱口 惠俊	25		『日本型モデルとは何か―国際化時代におけるメリットとデメリット―』
008	日本思想の重層性	山折 哲雄	25		『日本における女性―日本思想における重層性―』
009	市場制度の国際比較	村上 泰亮	20		
010	市場制度の動態―日本を中心に―	飯田 経夫	11		『市場制度の動態』
011	東アジアの本草と博物学の世界	山田 慶兒	33		『物のイメージ・本草と博物学への招待』
012	歴史認識と歴史意識：日本の歴史研究	速水 融	16		
013	日本人の自然観	伊東俊太郎	29		『日本人の自然観―縄文から現代科学まで―』
014	昔話、そのアジア・アフリカに通底するものの研究	河合 隼雄	22		
015	交渉行動様式の国際比較	木村 汎	41		『国際交渉学―交渉行動様式の国際比較―』
016	「理想郷」の比較文化史	芳賀 徹	49		
017	日本の科学と文明	伊東俊太郎	32		『日本の科学と文明―縄文から現代まで―』
018	日本の想像力	中西 進	39		『日本の想像力』
019	近代化過程における人口と家族	速水 融	36		『近代移行期の人口と歴史』
020	世界の中の日本型システム	濱口 惠俊	34		『日本文化は異質か』
021	生命と現代文明	早川 聞多	21		『現代生命論研究』
022	日本文化の新断面―かざり並びに奇人研究―	辻 惟雄	45		『「かざり」の日本文化』
023	公家と武家	村井 康彦	24		『公家と武家―その比較文明史的考察―』
024	短冊の研究	杉本秀太郎	17		
025	日本人はキリスト教をどのように受容したか	山折 哲雄	29		『日本人はキリスト教をどのように受容したか』
026	日本文化の深層と沖縄	梅原 猛、山折 哲雄	35		『日本文化の深層と沖縄』
027	総合雑誌『太陽』の総合的研究	鈴木 貞美	46		『雑誌『太陽』と国民文化の形成』
028	日本人および日本文化の地域性	尾本 恵市	41		
029	制約に基づく日本語の構造の研究	郡司 隆男	15		『制約に基づく日本語の構造の研究』
030	歴史のなかの病いと医学―日本を中心に―	山田 慶兒	38		『歴史の中の病と医学』
031	現代日本人の労働・遊び観および行動の歴史的発達	セップ・リンハルト	21		『日本人の労働と遊び・歴史と現状』
032	魔女と気候の文明史―アニミズム世界の再発見―	安田 喜憲	36		『魔女の文明史』
033	日本型システムの編成原理	濱口 惠俊	27		『日本社会とは何か―〈複雑系〉の視点から―』
034	日本における中産階級の成立過程―人口・家族・職業・階層―	園田 英弘	26		
035	近代日本の女たち―その表象と自己表現―	芳賀 徹	54		
036	身体技法を通してみた東アジアの宗教交流史	石田 秀実	23		『東アジアの身体技法』
037	現代日本の社会科学におけるアメリカニズム	飯田 経夫	13		
038	転換期における法と社会	石井 紫郎	18		
039	文学における近代―転換期の諸相―	井波 律子	51		『文学における近代―転換期の諸相―』
040	日本人と英語：英語化する日本の学際的研究	津田 幸男	17		『日本人と英語』
041	公家と武家―その比較文明史的考察―	笠谷和比古	37		『公家と武家Ⅱ―「家」の比較文明史的考察―』
042	東アジア地中海世界における文化圏の形成過程―3世紀から7世紀にかけて―	千田 稔	44		『海の古代史―東アジア地中海考―』
043	大正期総合雑誌の学際的研究	鈴木 貞美	58		『雑誌『太陽』と国民文化の形成』
044	日中考古学の文化比較研究	高 崇文	25		
045	家族と人口の歴史社会学	落合恵美子	51		
046	将棋の戦略と日本文化	尾本 恵市	22		『日本文化としての将棋』
047	日本社会における会合の実態とその持つ意味についての歴史的研究	小泉 和子	16		
048	画像資料が物語る身体の文化史	栗山 茂久	36		
049	日本における怪異・怪談文化の成立と変遷に関する学際的研究	小松 和彦	36		『日本妖怪学大全』
050	通婚圏、配偶者選択および性淘汰によるヒトの進化	赤澤 威	26		
051	危機管理と予防外交	木村 汎	31		『国際危機学―危機管理と予防外交―』
052	高精度分解能の気候変動と文明の盛衰	安田 喜憲	31		『龍の文明史』
053	日本における情報化とジャーナリズム機能の変容―日米国際比較を軸として―	柴山 哲也	33		『日本のジャーナリズムとは何か―情報革命下で漂流する第四の権力―』
054	日本の語り物―口頭性・機構・意味―	アリソン・トキタ	45		『日本の語り物―口頭性・構造・意義―』
055	19世紀の日本「発見」―旅行と旅行記の中の異文化像―	白幡洋三郎	35		『旅と日本発見―移動と交通の文化形成力―』
056	ベトナム・日本関係のアジアにおける役割と影響―太平洋協力関係の現在と未来―	グエン・ズイ・ズン	17		『日本・ベトナム関係を学ぶ人のために』
057	類似性の科学と模倣の情報文化に関する研究	山田 奨治	30		『模倣と創造のダイナミズム』
058	平安人物志の研究	光田 和伸	25		
059	日本人の時間意識の変遷	橋本 毅彦	18		『遅刻の誕生―近代日本における時間意識の形成―』
060	日本の政治経済とアジア諸国	村松 岐夫	20		『日本の政治経済とアジア諸国［上巻］政治秩序篇』
061	聖なるものの形と場	頼富 本宏	48		『聖なるものの形と場』
062	武器の進化・退化の学際的研究（考古・歴史編）	石井 紫郎	18		『武器の進化と退化の学際的研究―弓矢編―』
063	大英帝国・英連邦の文明論的研究―日本との比較を中心に―	川勝 平太	24		『アジア太平洋経済圏史1500―2000』
064	日本のモダニズム―関西を中心とした学際的研究―	鈴木 貞美	36		『関西モダニズム再考』
065	公家と武家―王権と儀礼の比較文明史的研究―	笠谷和比古	50		『公家と武家Ⅲ―王権と儀礼の比較文明史的考察―』
066	王権と神祇	今谷 明	20		『王権と神祇』
067	徳川日本の家族と社会	落合恵美子	31		『徳川日本のライフコース』
068	「東アジア」的空間と都市との関係体の形成と変容	千田 稔	39		
069	欠如・逆欠如の観点から見た日本の生活文化	園田 英弘	22		『逆欠如の日本生活文化―日本にあるものは世界にあるか―』
070	生きている劇としての能：謡曲の多角的研究	ジェイ・ルービン	18		『桂坂謡曲談義―高砂・定家・三井寺・弱法師・鞍馬天狗―』
071	日本語系統論の現在	アレキサンダー・ボビン	20		『日本語系統論の現在』
072	モンゴロイドの自然誌	赤澤 威	26		
073	日本植民地法制度の形成と展開に関する構造的研究	浅野 豊美	21		『植民地帝国日本の法的構造』
074	表現における越境と混淆	井波 律子	28		『表現における越境と混淆』
075	近代中国東北部（旧満州）文化に関する総合研究	劉 建輝	39		『満洲浪曼』（復刻）第1～7巻・別巻
076	歴史的空間情報の解析・解釈法の研究	宇野 隆夫	30		『実践 考古学GIS―先端技術で歴史空間を読む―』
077	日本人の異界観―その構造と意味―	小松 和彦	29		『日本人の異界観―異界イメージの探求―』
078	旅の「情報」と「表現」―交流と孤立から見た日本文化史の再検討―	白幡洋三郎	21		『旅と日本発見―移動と交通の文化形成力―』
079	近代化と日本人の身体感覚	北澤 一利	13		『近代日本の身体感覚』
080	1920―1970の五十年間にわたる日本文学・日本文化の連続性・不連続性	エドゥアルド・クロッペンシュタイン	19		『日本文化の連続性と非連続性 1920年―1970年』
081	コマーシャル映像にみる物質文化と情報文化	山田 奨治	25		『文化としてのテレビ・コマーシャル』
082	公家と武家―官僚制と封建制の比較文明史的研究―	笠谷和比古	52		『公家と武家Ⅳ―官僚制と封建制の比較文明史的考察―』
083	京都を中心とした、日本の伝統工芸の過去・現在・将来	稲賀 繁美	67		『伝統工藝再考 京のうちそと―過去発掘・現状分析・将来展望―』
084	性欲の文化史	井上 章一	27		『性の用語集』
085	文化としての植物―日本の内と外―	光田 和伸	19		
086	戦間期日本の社会集団の相互関係とネットワークについて―政・官・軍・メディア・経済界・教育事業家などを中心に―	猪木 武徳	23		『戦間期日本の社会集団とネットワーク―デモクラシーと中間団体―』
087	出版と学芸ジャンルの編成と再編成―近世から近現代へ―	鈴木 貞美	69		『明治期「新式貸本屋」目録の研究』
088	「封建・郡県」論を巡った中国と日本における思想連環―漢字文化圏における他国認識と自国改革―	張 翔	27		『「封建」・「郡県」再考―東アジア社会体制論の深層―』
089	日本文明史の再建―21世紀の環境・経済・文明―	安田 喜憲	78		『山岳信仰と日本人』
090	日本の近代化過程における技術と身体の思想	木岡 伸夫	23		『技術と身体―日本「近代化」の思想―』
091	日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚	松田 利彦	31		『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』
092	「関西」史と「関西」計画―文化の生成と自然的・社会的基盤―	千田 稔	31		『関西を創造する』
093	近代東アジアにおける二字熟語概念の成立に関する総合的研究	馮 天瑜	25		『语义的文化变迁』
094	日本における「死の場所」と死生観の変遷に関する総合的研究	近藤 功行	14		『死の儀法―在宅死に見る葬の礼節・死生観―』
095	「文明交流圏」としての「海洋アジア」	川勝 平太	25		
096	王権と都市に関する比較史的研究	今谷 明	23		『王権と都市』
097	日本における住まいの風土性・持続性	オギュスタン・ベルク	12		『日本の住まいと風土性』
098	前近代東アジア三国の交流と文化的波長	崔 博光	55		
099	幸田露伴の世界	井波 律子	15		『幸田露伴の世界』
100	怪異・妖怪文化の伝統と創造―前近代から近現代まで―	小松 和彦	31		『妖怪文化の伝統と創造―絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで―』
101	文化の所有と拡散	山田 奨治	30		『コモンズと文化―文化は誰のものか―』
102	近代東アジアにおける知的空間の形成―日中学術概念史の比較的研究―	孫 江	41		『東アジアにおける近代知の空間の形成』
103	TOWARDS A NEW JAPAN?—Bridging the Perception Gap Concerning Japan's Contemporary Cultural Identity—	リーン・T・セーヘルス	21		*A NEW JAPAN FOR THE TWENTY-FIRST CENTURY*
104	古代東アジア交流の総合的研究	王 維坤	30		『古代東アジア交流の総合的研究』
105	日本文明史の再建―生命文明の時代を求めて―	安田 喜憲	69		
106	性欲の社会史	井上 章一	26	1	『性的なことば』
107	近代日本の公と私、官と民―比較の視点から―	猪木 武徳	20		『近代日本の公と私、官と民』
108	都市文化とは何か？―ユーラシア大陸における都市文化の比較史的研究―	白幡洋三郎	36	1	『都市歴史博覧―都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ―』
109	18世紀日本の文化状況と国際環境	笠谷和比古	53		『一八世紀日本の文化状況と国際環境』
110	東アジアにおける知的システムの近代的再編成	鈴木 貞美	85	6	『日本研究』第40集〈共同研究報告〉
111	アジアにおける家族とジェンダーの変容：近代化とグローバル化の時代に	落合恵美子	31		『アジア女性と親密性の労働』
112	「満州」学の整理と再編	劉 建輝	43	2	
113	民謡研究の新しい方向	細川 周平	27	1	『民謡からみた世界音楽―うたの地脈を探る―』
114	戦後政治・外交政策の検証と再定義（開催に至らず）	池内 恵	20		
115	仏教からみた前近代と近代	末木文美士	29	1	『妙貞問答を読む―ハビアンの仏教批判―』
116	植民地帝国日本における支配と地域社会	松田 利彦	34	4	『地域社会から見る帝国日本と植民地―朝鮮・台湾・満洲―』
117	「東洋美学・東洋的思惟」を問う：自己認識の危機と将来への課題	稲賀 繁美	89	10	『東洋意識 夢想と現実のあいだ 1887―1953』
118	文明と身体	牛村 圭	23	1	
119	日本の近代化とプロテスタンティズム	上村 敏文	39	4	『日本の近代化とプロテスタンティズム』
120	日本における翻訳の文化史	ジェラリー・アングルス	22	2	
121	怪異・妖怪文化の伝統と創造―研究のさらなる飛躍に向けて―	小松 和彦	29	4	『進化する妖怪文化研究』
122	生命文明の時代を創造する	安田 喜憲	74		
123	近代日本における指導者像と指導者論	戸部 良一	22	2	『近代日本のリーダーシップ―岐路に立つ指導者たち―』
124	帝国と高等教育―東アジアの文脈―	酒井 哲哉	19	5	『帝国日本と植民地大学』
125	「日本浪曼派」とアジア	呉 京煥	21		
126	東アジア近現代における知的交流―概念編成を中心に―	鈴木 貞美	81	5	
127	日記の総合的研究	倉本 一宏	67	4	『日記・古記録の世界』
128	文学の中の宗教と民間伝承の融合：宮沢賢治の世界観の再検討	プラットゥ・アブラハム・ジョージ	16		『宮澤賢治の深層―宗教からの照射―』
129	夢と表象―メディア・歴史・文化―	荒木 浩	34	3	『夢見る日本文化のパラダイム』
130	徳川社会と日本の近代化―17～19世紀における日本の文化状況と国際環境―	笠谷和比古	44	1	『徳川社会と日本の近代化』
131	「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み―	伊東 貴之	43	5	『「心身／身心」と環境の哲学―東アジアの伝統思想を媒介に考える―』
132	新大陸の日系移民の歴史と文化	細川 周平	29	3	『日系文化を編み直す―歴史・文芸・接触―』
133	仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論	フィリップ・ボナン	25	3	*Vocabulaire de la spatialité japonaise*
134	デジタル環境が創成する古典画像資料研究の新時代	楊 暁捷	17		『デジタル人文学のすすめ』
135	人文諸学の科学史的研究	井上 章一	28		『学問をしばるもの』
136	日本庭園のあの世とこの世―自然、芸術、宗教	白幡洋三郎	24	3	『「作庭記」と日本の庭園』
137	現代民俗研究方法論の学際的研究	山 泰幸	14		『異人論とは何か―ストレンジャーの時代を生きる―』
138	建築と権力の相関性とダイナミズムの研究	御厨 貴	12		『建築と権力のダイナミズム』
139	昭和40年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析―ザ・タイガースの研究	磯前 順一	18		『ザ・タイガース研究論―昭和40年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析―』
140	21世紀10年代日本文化の軌道修正：過去の検証と将来への提言	稲賀 繁美	56	3	『海賊史観からみた世界史の再構築―交易と情報流通の現在を問い直す―』
141	万国博覧会と人間の歴史―アジアを中心に（2012年度は「万国博覧会とアジア」）	佐野真由子	28	5	『万国博覧会と人間の歴史』
142	日本文化形成と戦争の記憶	セオドア・F・クック	45		
143	日本的時空観の形成	吉川 真司	28	2	『日本的時空観の形成』
144	日本仏教の比較思想的研究	末木文美士	32	4	『比較思想から見た日本仏教』
145	植民地帝国日本における知と権力	松田 利彦	34	10	
146	日本的教育文化の複数地域展開に関する比較研究―ブラジル・フィリピン・ハワイ・アメリカの日系教育史を中心に―	根川 幸男	26	2	『越境と連動の日系移民教育史―複数文化体験の視座―』
147	マンガ・アニメで日本研究	山田 奨治	23		『マンガ・アニメで論文・レポートを書く―「好き」を学問にする方法―』
148	昭和戦後期における日本映画史の再構築	谷川 建司	17	1	『戦後映画の産業空間―資本・娯楽・興行―』
149	戦争と鎮魂	牛村 圭	39	6	
150	画像資料（絵葉書・地図・旅行案内・写真等）による帝国域内文化の再検討	劉 建輝	42	8	
151	おたく文化と戦時下・戦後	大塚 英志	30	4	『動員のメディアミックス―〈創作する大衆〉の戦時下・戦後―』
152	日本の軍事戦略と東アジア社会―日中戦争期を中心として―	黄 自進	24		『〈日中戦争〉とは何だったのか―複眼的視点―』
153	日本大衆文化とナショナリズム	朴 順愛	13		『大衆文化とナショナリズム』
154	戦後日本文化再考	坪井 秀人	56	3	
155	説話文学と歴史史料の間に	倉本 一宏	47	5	
156	日本の舞台芸術における身体―死と生、人形と人工体	ボナヴェントゥーラ・ルペルティ	22		
157	明治日本の比較文明史的考察―その遺産の再考―	瀧井 一博	42	2	
158	浪花節の生成と展開についての学際的研究	真鍋 昌賢	18	2	
159	3.11以後のディスクール／『日本文化』	ミツヨ・ワダ・マルシアーノ	28	1	
160	比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想―王朝・帝国・国家、または、思想・宗教・儀礼―	伊東 貴之	73	4	
161	万国博覧会と人間の歴史	佐野真由子	25	4	
162	多文化間交渉における『あいだ』の研究	稲賀 繁美	65	3	
163	差別から見た日本宗教史再考―社寺と王権に見られる聖と賎の論理	磯前 順一	51	10	
164	日本語の起源はどのように論じられてきたか―日本言語学史の光と影	長田 俊樹	21	3	
165	投企する古典性―視覚／大衆／現代	荒木 浩	38	3	
166	「運動」としての大衆文化	大塚 英志	40	5	
167	音と聴覚の文化史	細川 周平	31	1	
168	東西文明論―日本を東西の中間地として、懸け橋という特殊な使命を与える言説の分析	ディック・ステゲウェルンス	17		
169	近代東アジアの風俗史	井上 章一	10		

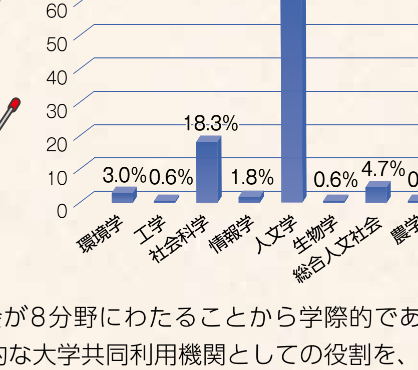
※タイトルは背表紙からとり成果物が複数ある班は、発行年の早いものとした。

海外共同研究員とは？

海外の研究機関等に勤めている研究者を、日文研の共同研究における国際性をより高めるために、2009年度から招へいしています。

研究代表者

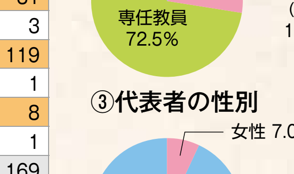
①共同研究会の分野別比率



環境学	5
工学	1
社会科学	31
情報学	3
人文学	119
生物学	1
総合人文社会	8
農学	1
計（班数）	169

※五十音順
※文系を着色
※1研究課題につき1班とした。

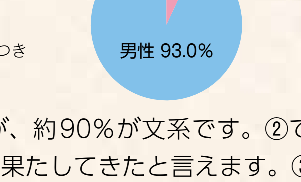
②代表者の属性



客員教員（海外機関所属）外国人研究員	24
客員教員（国内機関所属等）	23
専任教員	124
計（のべ人数）	171

※169班のうち2班が代表者2名

③代表者の性別



女性	12
男性	159
計（のべ人数）	171

※169班のうち2班が代表者2名

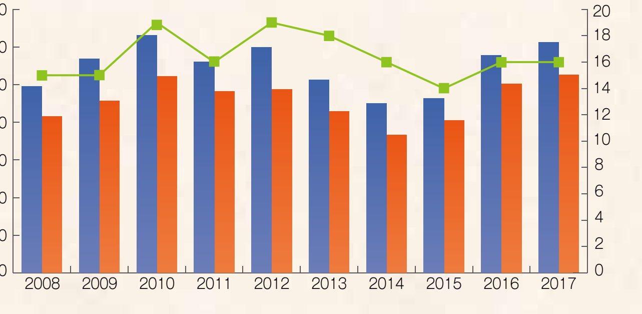
①では研究会が8分野にわたることから学際的であると言えますが、約90%が文系です。②では海外機関所属の研究代表者が14%で、国際的な大学共同利用機関としての役割を、こうした形でも果たしてきたと言えます。③では女性の研究代表者が7%で、ジェンダーバランスがまだまだ悪いと言えます。数値であらわすと共同研究会における過不足がわかります。

共同研究員

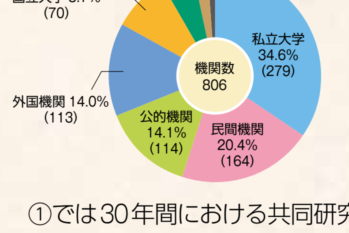
①共同研究員総数（30年間）

共同研究員数	5,490
海外共同研究員数	162
平均共同研究員数	32

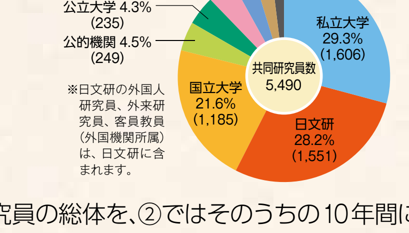
②共同研究員数・班数の推移（10年間）



③機関数（30年間）



④機関属性別共同研究員数（30年間）



※日文研の外国人研究員、外来研究員、客員教員（外国機関所属）は、日文研に含まれます。

①では30年間における共同研究員の総体を、②ではそのうちの10年間に焦点化し、年間の平均共同研究員数「540人」と平均班数「約16班」を出してみました。そして共同研究員が所属する機関を③で分類し、所属機関毎の共同研究員数を④で出してみました。④のうち2.9%を占める「その他」には、まんが家やエンジニア、ダンス批評家や農業問題ジャーナリストなど、共同研究に幅と深みと面白さを加える多種多様な職種の共同研究員が含まれています。

研究発表

（10の桁以下切り捨て）

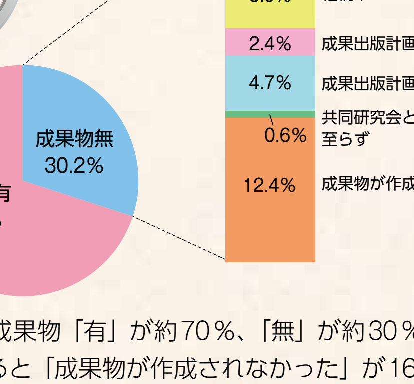
研究発表	6,500
成果物に関わるもの※1	200
共同研究会の運営に関わるもの	200
その他※2	1,100
合計	8,000

※1 編著者が複数の場合は複数カウント。
※2 討論等 読書会、エクスカーション等も含む。

6500分の1「茶屋の看板娘」

30年間における「研究発表タイトル」約6500を、時代や人名等、単語で区切って法人化前後の頻度順（トップ10）を出そうと試みました。しかしこの方法では、そこから有意なトレンドを見出すというよりは、研究がもつ深みや面白さが立ち消えてしまうことがわかりました。たとえば「茶屋の看板娘」の場合、「茶屋／の／看板／娘」となり、頻度が低いので浮上せず、また世界的な視野から「「場」の日本文化」（004）を総合的に解明しようとする研究会の意図も汲み取れなくなります。日文研の共同研究は、こうした数値では表せない豊かさを内包していると言えます。

成果物



2018年3月31日現在　単位：班

共同研究（班数）1987-2017年度					計	法人化前	法人化後
	169	有	118		118	67	51
		無	51	*1 国際シンポジウム集	7	5	2
				継続中	10	—	10
				*2 成果出版計画書提出済	4	—	4
				成果出版計画書未提出	8	—	8
				共同研究会として開催に至らず	1	0	1
				成果物が作成されなかった	21	16	5
				合計	169	88	81

成果物数 129
上下巻、シリーズ等は「1」とした。

＊1 過去には国際シンポジウム集を成果物と見做したこともあった。
＊2 共同研究委員会に提出・承認されたもの。

グラフでは成果物「有」が約70%、「無」が約30%となっていますが、表に目を移せば、2004年の法人化後はそれ以前と比べると「成果物が作成されなかった」が16から5、つまりは3分の1以下となっています。共同研究の内実や業績はその成果物のみで計ることはできませんが、広く一般に対して発信することは重要なことと思われます。